

## 横手慎二著『スターリン——「非道の独裁者」の実像』

(中公新書, 2014年, 318 ページ)

塩川 伸 明

(東京大学名誉教授)

**Yokote, Shinji, *Stalin—The Realities of the “Cruel Dictator”***

(Tokyo: Chuokoron-shinsha, 2014)

SHIOKAWA, Nobuaki

Professor Emeritus, The University of Tokyo

## 1 はじめに

本書の「はじめに」には、次のようなことが書かれている。

スターリン時代のソ連で数多くの恐ろしい出来事があったことは広く知られており、彼を「底知れぬ悪行と非道を繰り返した独裁者」と捉える見方は大多数の日本人に根付いている。他方、現在のロシアではスターリンについての評価が真っ二つに分かれており、肯定的に評価する声と否定的に評価する声が拮抗している。なぜそのようなことが起きるのか。ロシア人の多くはスターリンがもたらした悲惨な事実をすっかり忘れてしまったのだろうか。それともロシア外部に住む者たちの方が、何か重要なことを見落としているのだろうか。

こういう問いを出した上で、著者は、「農業集団化に伴う飢餓や大粛清といった暗い過去」を事実として認めている現在のロシア人が、それでもなおスターリンを一方向的に断罪するのは正しくないと思なしている以上、「彼を知らないのは彼らではなく、私たちかもしれない」と考え、「私たちはどこまでスターリンを知っているのか」と問い直すという課題を立てている。ここには、本書を貫く著者の問題意識が鮮明に語られている。

本書はいわゆる専門書ではなく、広範な一般読者を対象とした書物だが、専門家でない一般の日本人のソ連およびロシアに関するイメージが概して暗いものであることはいうまでもない。もっとも、ソ連とロシアは同じではないから、ソ連イメージとロシア・イメージも異なっておかしくないが、「ソ連がなくなった後も、ロシアはあまり変わっておらず、相変わらず暗い」というのが平均的なイメージだろう。そのような見方にはそれなりの理由があり、それを頭から退けるわけにはいかないが、それにしても、ある国の歴史と現在を丸ごと暗いものと決めつけ、そういう暗い国にはおおよそ共感も関心も持てないという発想が広まっているのは、外国観として健全なことではない。

外国への関心の持ち方として、明るい面や立派な面が喧伝されている国——いまや遠い昔の話となってしまったが、半世紀ほど前のソ連もそうだった——に憧れをいだく一方、そうでな

い国にはまるで共感をもつことができないという発想は、ある程度まで自然なのかもしれない。しかし、どんなに暗い国であっても、そこには人間が生きており、彼らはさまざまな悩みや喜びや悲しみ、希望と絶望をかかえ、模索と努力を重ねているのであって、そういった人々の営みは、その悲劇性を含めて共感の対象たり得るはずである。これは本来、当たり前のことだが、そういうことを一般読者に分かりやすく説いたソ連関係の書物はあまりにも少ない。そうした中で、広い範囲の読者に安心して薦められる良書が出たことを喜びたい。これが本書の最初の、そして最大の読後感である。

本書はその対象の性質からして当然ながら、数多くの悲劇的な出来事や残虐な行為をリアルに描いている。と同時に、そうした事態を「およそ人間でないもの」の行為という風にグロテスクに誇張するのではなく、どうしてそういう事態が——それも、元来は「人間解放」といった理念を掲げていた人たちによって——引き起こされてしまったのかを幅広く考察し、バランスのとれた歴史像を描こうとしている。このような著者の姿勢には共感するところが大きい。

## 2 本書の構成と内容

ごく簡単に本書の構成を紹介するなら、第1-2章はスターリンの少年時代および青年時代を扱っている。この時期のスターリンの軌跡は従来あまり広く知られてこなかったが、この二つの章では、各種の新資料を含めてこの時期のスターリン像がリアルに描かれている。一部の著作家は、スターリンがもともと幼時から残虐な性向をもっていたのだと論じる傾向があるが、本書ではそうした議論は根拠のないものとして退けられている。若き日のスターリンのつくった詩を紹介したり（19-25, 47-50頁）、カフカース（コーカサス）という場の独自の意味について論じたりしているあたり（36-43頁）は特に興味深い。

第3-4章は、20世紀初頭に彼が先ず「コーバ」、次いで「スターリン（鋼鉄の人）」という変名を使い出した頃から1917年のロシア革命までの時期を取り上げ、革命家としてのスターリンを描いている。ここでは、逮捕、流刑、脱走、非合法活動（現金輸送車襲撃を含む）等々が論じられているが、同時に、彼が最初から「鋼鉄の人」になりきったわけではないことを物語るエピソードなども紹介されている（82-83頁）。この時期のスターリンは在外経験をほとんどもたず、ヨーロッパ的教養を身につけた指導者たち（レーニン、トロツキー、ブハーリンら）とは異質だが、ロシアの革命運動が直面する具体的問題——とりわけ党組織論および民族問題——に関心を集中させ、そのことによって将来の統治者にふさわしい資質を養っていた人として描かれている。革命時における彼の活動は地味なものであり、トロツキーらに比べれば精彩を欠いたが、その後の内戦の過程で次第に頭角を現わしていく。

第5-8章は、スターリンが最高指導者となった時期を扱っている。この時期においては彼個人のライフヒストリーとソ連史の全体とが分かちがたく結びつくため、これらの章は通常の伝記というよりは、むしろソ連政治史全般に関する概説という様相を帯びる。この時期のソ連の諸政策の最高責任者が彼だったことは明らかだが、個々の政策決定において彼個人がどのように関与していたのか、その際、内面でどのような思いをめぐらしていたのかといった問題に迫ることは、ことの性質上、至難である。本書では、限られた資料の範囲内で精一杯その問題に迫り、彼の軌跡を通してソ連史を描くことが目指されている。分量的に本書の最大の部分をなしている、簡単に要約するわけにはいかないが、いくつかの注目すべき個所については後で取りあげ

ることとしたい。ここでは一点だけ、やや小さなことだが、スターリンの蔵書を紹介した箇所(144-147頁)は、彼の知的関心の所在を物語っていて特に興味深いということを書いておく。

終章では、スターリン死去時の状況、死後のスターリン批判およびその後の論争が取り扱われている。末尾には、2003年にロシア科学アカデミー付属歴史研究所で開かれたシンポジウム「スターリンなき50年」における多様な議論の紹介がある(294-298頁)。こうした現代ロシアの歴史家たちの議論は、「はじめに」で簡単に触れられた大衆のスターリン観とも一定の関係があるが、そのことに関する明示的な説明はない。そこまで踏み込んだなら本書の意図がより分かりやすくなったのではないかという気もするが、それは別個の課題ということなのかもしれない。

### 3 外交と内政のからみあい

著者は元来、外交史を専門としており、対外関係を扱った箇所には、そういう著者ならではの腕の冴えが見られる。その際、外交と内政を別々の主題として論じるのではなく、両者の緊密なからみあいを描き出している点は、著者の力量がいかに発揮されたものといえる。いくつかの例を挙げよう。

158-161頁では1927年の英ソ緊張が論じられているが、この対外緊張は二つの経路で内政に影響したことが指摘されている。一つには、戦争の噂を聞いた農民たちが穀物の市場への供出を渋りだし、穀物調達危機という深刻な問題を招くこととなった。もう一つには、干渉戦争の可能性が迫っているという切迫した意識——著者によれば、「この脅威認識は、けっしてスターリンが反対派を追い詰めるためにでっちあげたものではなかった」——は、工業化のテンポ引き上げ論を強め、ブハーリン流のゆっくりした工業化政策の基盤を掘り崩した。このこと自体は、以前からも知られていたことではあるが、ネップ末期における経済政策の大転換の一つの重要な要因として対外緊張があったことを明確に示している、重要な指摘である。

第6章後半から第7、8章にかけては、1930年代の国際緊張から独ソ戦を経て冷戦開始に至る時期を扱っているが、これは対外関係が政治史全体さらには社会史にまでも大きな影響を及ぼした時期であるため、外交と内政のからみあいという問題が最も顕著にあらわれている。そのすべてを取り上げるわけにはいかないが、眼にとまったいくつかの点に触れてみたい。

210-219頁では、1938年のミュンヘン会談から翌年の独ソ不可侵条約締結に至る過程が扱われている。これは古くから論争の絶えないテーマだが、ここでの著者の叙述は、今日に至るまで議論が分かれている問題について、多面的な目配りを利かせながら、複雑な情勢を淡々と描いている。独ソ不可侵条約に至る交渉については、今なお異なる解釈が並び立っていることを紹介した後、「ともあれ」という言葉でその後の経過に転じている(215頁)。こういう書き方は、「どちらの解釈が正しいのか」という回答を要求する読者からは不満を買うかもしれないが、現時点で言える限りのことを言って、それ以上には踏み込まないという著者の姿勢が示されているととれる。

1941年6月に始まる独ソ戦(ソ連からは「大祖国戦争」)については、その多面的な諸相が描かれているが、スターリンの息子であるヤコフがドイツ軍の捕虜となり、捕虜交換の取り引きも成り立たずに収容所で死亡した(射殺説と自殺説とがあるという)というあたりの記述(226-227頁)は特に目を引く。

第8章は冷戦開始期を扱っているが、ここは近年盛んになりつつある冷戦史研究の一環として重要な意味をもつ。著者によれば、1945年半ばの時点では、スターリンは米ソ関係に深刻な対立が起こるとは考えていなかった。まもなく英米両国とソ連が世界各地の支配をめぐる競争状態に入ったが、それでも一部の地域ではスターリンは早々と和解の姿勢を示した。「冷戦がたけなわの頃の研究では無視されがちであったが、彼は柔軟な対応を見せていたのである」(246頁)。もっとも、そのような状態は長続きせず、1946年半ば以降、特にトルコおよびギリシャとの関係で米ソ対立は深刻化した。こうした中で47年3月に発せられたトルーマン・ドクトリンについては、「スターリンに限らず、ソ連の人々から見れば、これはあまりに大げさな議論であった」との評価が示されている(248頁)。

最初から対決を基調としていたわけではないソ連外交が決定的に対決へと向かう重要な契機としては、マーシャル・プランが重視されている。この時期のソ連外交については今なお不明なところが多いが、本書では、未公刊文書の閲覧を許されたロシアの研究者の仕事に基づいて、内情の解明が目指されている。ソ連は当初、「マーシャル・プランの政治的利用を警戒しつつ、参加する」という態度をとろうとしたが、その試みが拒まれることで対抗が不可避となった。この経緯はその後の対外政策の方向を決定づけたとされる(249-252頁)。

こうした流れの中で、東欧諸国に対する政策も大きく転換する。その皮切りとして、1948年3月にチェコスロヴァキアのマサリックが自殺した件が取りあげられているが(254頁)、その前夜の2月政変に触れていないのはどうしてだろうか。この事件を過大評価すべきでないとの判断があるのかもしれないが、そう明示されているわけでもないで、やや解釈に惑う。続くベルリン封鎖事件については、通説的な解釈を紹介した後に「この説明の当否はともかく」という意味深長な表現がある(255頁)。ここでも、著者の意図がよく飲み込めず、戸惑いを感じる。

この後もレニングラード事件、ユダヤ人排斥、中国革命、朝鮮戦争と重要な出来事が相次ぐが、そういう中で注目されるのは、晩年のスターリンがそれ以前に持っていたような判断力を失ったのではないかという指摘である。おそらくそのために、スターリン最末期の政策は解釈が一段と困難になるというのである。朝鮮戦争の停戦についても、スターリンこそが停戦を妨害した張本人で、だからこそ彼が死んですぐに停戦交渉が急速に進んだという説と、逆にスターリンは停戦の必要性を早くから認識していたが、毛沢東が名誉ある協定を求めたために戦争が続いたという説が並び立っているという(267頁)。

ともかく1952-53年ともなると、スターリンは「統治者に必要な能力を半ば以上失っていた」とされる(272頁)。1920-40年代には、評価は分かれるにしてもとにかく高度の統治の才能を発揮していた彼が遂にそのような状態にまで陥ったのは、老化のせいと、権力の絶頂にいる期間が長くなりすぎたせいの両方の要因が作用していたのだろう。そのような彼がまもなく世を去ったことは、歴史の一時代に幕を下ろす意味をもった。

#### 4 いくつかの小さな疑問

全体として優れた著作である本書にも、あまりにも多くの論点を取り扱っている以上避けがたいことだが、多少疑問を感じる個所もないわけではない。どれも比較的小さな問題ではあるが、いくつか評者の眼にとまった点について書いておきたい。

124-132頁では、ソ連邦結成期の一連の論争が取りあげられている。この主題については、

これまでも膨大な研究がある。かつては、このときの論争を《レーニン＝善玉、スターリン＝悪玉》的に整理して、「もしレーニンが長生きしていたなら、スターリンの暴政は防がれたのではないか」という風に論じられる傾向があったが、著者はそうした議論が根拠を欠くことを指摘している。それはよいのだが、このときの主たる論点のうち「自治化」案問題とザカフカース連邦結成問題とがきちんと区別されていないため、論争の構図が十分明確にはなっていない。また、スターリンが最も恐れていたのは少数民族の自主性ではなく、むしろロシア共和国を「民族としてのロシア人の共和国」とすることによってロシア人結集の制度的基盤を与えることだったのではないかという、近年有力に唱えられるようになった解釈をどう考えるのかという問題にも触れられていない。

162-165頁では、1928年のシャフトゥイ事件が取りあげられ、これが「ブルジョア専門家」排斥キャンペーン拡大の契機となったことが論じられている。これはその通りだが、1931年以降に専門家政策の転換があったことに触れられていないのはどうしてだろうか。不注意な読者がこれだけを読むと、この後のソ連は専門家や知識人たちに対して一貫して抑圧的な政策を続けたようなイメージが浮かぶかもしれない。しかし、「ブルジョア専門家」への抑圧が行き過ぎたことへの懸念から、まもなく「ソヴェト的専門家」の重用への転換が生じたのであり、ソヴェト政権下で養成された「新しい専門家」が体制内エリートとして高い地位を占めるという長期的趨勢が生まれたことを思うなら、この転換は見落とすことのできない重要性をもっている。

200-203頁では、いわゆる「大粛清」が取り扱われている。この言葉遣いにも疑問の余地があるが、それはおくとして、ここでは大テロルの諸側面として、経済部門の管理者たち、女性、東清鉄道の従業員だった者、地方レベルの粛清が列挙され、「大粛清のすべてを単一の原因で説明することが不可能なことは明らかである」と論じられている。大テロルが複合的な現象であり、単一原因で説明し尽くされるわけでないという指摘には同感だが、ここでの書き方はやや羅列的であり、もう少し構造的に相互関係を論じてほしかったという憾みが残る。この部分の末尾近くでは、「しかし、こうした議論を押し進めることによって、大粛清の責任はスターリンにはなかったとする結論まで引き出すのはバランスを失っているように思われる」と書かれている(203頁)。それはそうだが、そこまで極端な結論を引きだしている論者が実際にいるのかという疑問が浮かぶ。スターリン一人にすべての責任を押しつけることへの疑問を提示したり、複合的な現象の各部分ごとに異なる責任を論じる議論はあるとしても、「責任はスターリンにはなかった」とまで結論する人はいないのではなからうか。とすれば、この個所は言わずもがなのことを確認しているような気がする。

291-294頁では、1987年のロシア革命70周年時におけるゴルバチョフ演説(11月2日)が取りあげられ、この演説はそれほど衝撃力のあるものではなく、「せいぜい折衷的、悪く言えば、予想以上にスターリンの歴史的功績を評価するもの」だったことが指摘されている。これ自体は当たっているが、この演説のおかれた歴史的文脈の評価が欠けている。革命70周年というのは確かに大きな区切りであり、最高指導者によって「決定版」的な歴史解釈が打ち出されるだろうという予測は当時からあった。しかし、その後の経過から振り返ってみるなら、これはまだベレストロイカ初期段階ともいべき時期であり、当時における政治指導部内での意見分布に制約されて、書記長演説も「折衷的」であるしかない時期の産物だった。より重要なことは、それまでのソ連の常識とは違って、この記念日演説が唯一絶対の指針とされるのではなく、

歴史論争はこの後も拡大し続けたことである。ゴルバチョフ演説の直後に『イズヴェスチヤ』紙（1987年11月5日）は、ソ連共産党中央委員会付属マルクス＝レーニン主義研究所長ミルノフをはじめとする著名な歴史家たちの発言を掲載したが、そこでは、この演説は歴史研究を制約する枠ではない、ここから少しも逸れてはいけないなどと考えるのは旧式の考えだ、との意見が表明された。その意味では、この記念日演説はそれほど大きな区切りをなしたとはいえない。むしろ、これが「公式見解」として歴史家に押しつけられなかったという事実こそ、大きな意味があった。実際、1987年段階で中途半端なものにとどまっていた「歴史の見直し」が88-90年に怒濤のような勢いで進展したのは周知のところである。

## 5 おわりに

いくつか細部にわたる疑問点を記したが、隴を得て蜀を望む言に過ぎない。全体として、バランスのとれた良書である。

スターリンおよびソ連の歴史については、研究書のレベルでは本格的で重厚な作品が次第に増大しつつある一方、一般読者向けの書物では、通俗的なイメージを増幅するようなキワモノまがいの本が跋扈しているという憂鬱なギャップがある。そうした中で、本書はそのギャップを埋めるものとして歓迎される。ロシア・ソ連史に多少なりとも関心をいだくさまざまな人たちに広く読まれることを期待したい。